

原 著

在宅高齢者における簡易嚥下状態評価 (EAT-10) と栄養状態との関連

秋山 理加¹⁾ 濱寄 朋子²⁾ 酒井 理恵^{1,3)}
 岩崎 正則¹⁾ 角田 聡子¹⁾ 邵 仁浩¹⁾
 葎原 明弘⁴⁾ 宮崎 秀夫⁵⁾ 安細 敏弘¹⁾

概要:【目的】在宅高齢者を対象として簡易嚥下状態評価票 (EAT-10) を用いて、嚥下状態と栄養状態の関連について明らかにすることを目的とした。

【対象および方法】新潟市の85歳在宅高齢者129名を対象とした。口腔と全身の健康状態に関するアンケートを郵送し自記式にて調査を行った。調査内容は、EAT-10、現在歯数、簡易栄養状態評価 (MNA-SF)、主観的健康観、老研式活動能力指標、Oral Health Impact Profile-49 (OHIP)、嚥める食品数である。これらの因子について、EAT-10の合計点数が3点以上を嚥下機能低下のリスク有り群とし、3点未満の群との比較検討を行った。

【結果】EAT-10によって、嚥下機能低下が疑われたものは52.7%であった。嚥下機能低下のリスク有り群ではOHIP高値 ($p<0.001$)、嚥める食品数低値 ($p<0.001$) と有意な関連がみられ、主観的健康観で“あまり健康ではない”者の割合が有意に高く ($p<0.001$)、MNA-SFで“低栄養”の割合が有意に高かった ($p=0.007$)。さらに、MNA-SFを従属変数としたロジスティック回帰分析の結果、栄養状態と嚥下機能には有意な関連がみられ、EAT-10の点数が高くなるほどMNA-SFで“低栄養のリスク有りまたは低栄養”となるオッズ比が有意に高かった ($p=0.043$)。

【結論】在宅高齢者の嚥下機能低下と低栄養状態との関連性が示唆された。

索引用語: 簡易嚥下状態評価票 (EAT-10), 嚥下機能低下, 低栄養

口腔衛生会誌 68 : 76-84, 2018

(受付:平成29年3月1日/受理:平成29年11月27日)

緒 言

嚥下障害は、栄養状態と関連していることが明らかとなっている¹⁻³⁾。急性期の高齢入院患者では、嚥下障害を有する者で有意に低栄養の者の割合が高かった^{1,2)}。また、嚥下障害は、自立高齢者の1年後の栄養状態悪化のリスク因子であった³⁾。高齢者の肺炎の多くは誤嚥性肺炎で、その発症と嚥下機能低下との関連が明らかとなっている⁴⁾。また、嚥下機能低下は、高齢者の楽しみの一つである食事摂取と関連が深いことから、高齢者のQuality of life (QOL) にとって重要な因子である⁵⁾。

これまでの嚥下障害に関する研究は、病院や施設におけるものや^{1,2,6)}、在宅高齢者における調査^{5,7-10)}が報告されている。わが国における地域在宅高齢者1,313人を対象とした報告によると、嚥下障害を有する者は13.8%

であったこと⁸⁾、要介護在宅高齢者を対象としたものでは、33.7%であったと報告されている¹⁰⁾。国外における健康な在宅高齢者を対象にした調査では、地域で異なるものの、嚥下障害を有する者は8~15%であったことが報告されている^{5,7,9)}。嚥下障害に対する介入研究の効果についての総説では、栄養状態改善、体重減少防止および肺炎罹患率低下に効果がみられたことが報告されている^{11,12)}。このように、近年高齢者における嚥下障害について多くの報告がなされているが、特に在宅における嚥下機能評価は、嚥下機能低下を早期に発見し、早期に介入を行うため、ひいては高齢者のQOL向上にとって重要であると考えられる。

嚥下機能評価方法のゴールドスタンダードは嚥下造影検査 (Video fluoroscopy :VF) であるが¹³⁾、特別な機器や技術が必要であり、高齢者施設や在宅での評価は難し

¹⁾九州歯科大学地域健康開発歯学分野

²⁾九州女子大学栄養学科

³⁾東京医療保健大学医療栄養学科

⁴⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔保健学分野

⁵⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科予防歯科学分野